

日本川崎病研究センターニュースレター

(No. 47) 2024. 1. 1

発行：特定非営利活動法人 日本川崎病研究センター

新年のご挨拶とご報告

今田義夫

明けましておめでとうございます。

昨年も相変わらず、コロナ渦に翻弄された1年でしたが、会員の皆様をはじめとして、多くの方々に、NPO 法人日本川崎病研究センターの活動に変わらぬご支援を頂きました。この場を借りお礼申し上げます。

コロナ感染症の流行の変化は子どもたちを取り巻く既知の感染症、特にRSウイルス感染症、アデノウイルス感染症、季節性インフルエンザ、溶連菌感染症などの流行動態にかつて経験したことのない、大きな変化を与えました。

川崎病についても当センターの事業である川崎病の疫学的研究として、自治医大の協力を得て行われた、27回全国調査(2021～2022年)で様々な有意の変化、新しい興味深い知見が確認されており、このことは、43回日本川崎病学会で中村理事により「第27回川崎病全国調査成績」と題して報告され大きな反響がありました。一方、中村理事が自治医大を定年になられ、調査体制の維持が難しく、かつ、全国調査の目的はほぼ達成されたとして、今回をもって終了する旨の報告もなされました。これに合わせ、柳川副理事長、中村理事が主体になって「第1回～第27回川崎病全国疫学調査総括」と題して全国調査の沿革、27回に及ぶ全国調査成績要約、50年間の全国調査の流れと情報処理を主体に多くの資料が

まとめられ、全国調査に関する学术论文一覧や貴重な写真も多く掲載され、11月に研究センターから出版されました。(会員の方には今回のニュースレターに同封いたします) 全国調査は、1970年に始まり、第16回(1999年～)からは当研究センターの主要な事業として自治医大の全面的なご協力により継続されました。半世紀を超えて継続された全国調査は、重松逸造先生に始まり、柳川、中村両理事により継続されました。長年のご功績に心からの感謝を申し上げます。

しかし、全国調査の終了を惜しむ声が多く、親の会や全国の小児科医から引き続き調査の継続を強く希望する声が多数寄せられ、センターとしても、8月25日に、臨時の「全国調査に関する会議」を開催し、対応を検討いたしました。結論を得るには至っていません。今後は、日本川崎病学会とも協力して、どのような調査が可能か前向きに検討することにしていきます。

コロナ渦の変遷が続く中、川崎病の発生の全国調査による、詳細な疫学的観察の重要性は増し、全国調査の継続は、原因究明に多くの示唆を与えてくれるに違いありません。皆様からご意見などを頂ければ幸いです。

さて、コロナ渦により開催が伸びていた、川崎ご夫妻を「偲ぶ会」を6月に開催することができました。多くの方々にご尽力いただき、心に残る会が開催できました。改めて感謝申し上げます。また、会に合わせて編集さ

れた、「川崎富作メモリアルブック」は川崎先生が生前残された学術論文とは違った先生のお人柄溢れる文章が多く掲載されています。ご希望の方は研究センターまでご連絡いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回のニュースレターには、高橋理事が日本川崎病学会の理事長に就任され、学会の今後の方針をお書き頂き、さらにセンターとの連携にも言及頂きました。

また、阿部理事には新理事として原因究明への強い意欲と次回の勉強会につきお書き頂きました。さらに弘野会員からは、新たな原因の可能性につき言及頂きました。お礼申し上げます。

当センターでは、会員の方々からの寄稿をお待ちしています。

(当センター理事長)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

日本川崎病学会理事長に就任して

高橋 啓

はじめに

2023年9月から一般社団法人日本川崎病学会理事長を務めることになりました。任期は2年です。本学会は研究会時代を含めて40年以上の歴史を有し、私が本学会でデビューしたのは1986年に神谷哲郎先生が会頭をされた第6回日本川崎病研究会総会でした。足が震えるほど緊張したのをはつきりと覚えています。

本会は疫学、遺伝、微生物、免疫、病理、小児科、内科、外科など多領域の研究者、そして川崎病の子供をもつ親の会などの団体により支えられ、川崎病という一つの疾患について討論する極めてユニークな組織です。私は2015年4月から6年間、任意団体日本川崎病学会会長を務めましたが、任期中に法人化の話が発議され準備を始めました。そして、2021年12月一般社団法人日本川崎病学会が設立され、社会的にもより信頼される団体となることができました。初代理事の方々御尽力により学会としての体制は大分整いました。2代目理事長としての私の役目は残された課題に対処し、学会基盤を固めて次代の日本川崎病学会を担う方々に少しでも良い形でバトンを渡すことであると考えています。

若手川崎病研究者の育成：先に述べたように日本川崎病学会は多領域の方々により構成される団体ですが、残念なことにここ数年学会員数は漸減しています。その理由の1つは、川崎病研究が新たな解析への切り口を見いだせていないことにあるのかもしれませんが。本会をさらに活気づけ発展させるためには若手研究者の力が必須で、川崎病が抱えている課題を私たちと共有した上で柔軟な発想力・思考力をもって突破口を見いだすことができる環境を提供します。川崎病の基本的事項から現在抱えている取り組むべき課題まで正しく理解して戴くために勉強会を開催し、WebやSNSなどを通じた情報発信を行います。

学会・団体間交流の推進：川崎病研究を推し進めるためには、国内外の関連学会・団体との連携を強化することも大切でしょう。日本小児科学会をはじめ小児、成人領域の循環器、リウマチ、免疫そして感染症など幅広い学会・研究会との交流、情報交換、共同研究を目指します。さらに、日米を軸に開催されてきた国際川崎病シンポジウムに加え、現在ではアジアや欧州においても川崎病研究が活発になされるようになってきました。これらの団体とも手を組んでグローバルな川崎病研究を展開します。一方、親の会や川崎病を経験された患者さんご自身との交流、意見交換の場を持つことも川崎病学会が担うべきとても大切な点であると考えます。

症例検討の重要性：日本川崎病学会が主導してきた多施設共同研究が実を結びつつあります。その一方で、本会は症例検討を大切にしてきた伝統があります。症例の中にこそ真実があります。患者さん一人一人について会員同士が十分に討論し、川崎病診療にフィードバックすることも忘れてはならない基本的姿勢であると感じています。

川崎病全国調査の新展開：1970年以降連続と続いてきた川崎病全国調査は、第27回調査をもってひとつの区切りがつけられました。しかし、数多くの新知見を世界に発信してきた疫学調査の重要性が今後も変わることはありません。そこで、日本川崎病研究センターの支援のもとで日本川崎病学会が調査の主体

となって全国調査を継続することにしました。これまで積み重ねてきたデータと比較検討可能な調査を継続すると共に、時代のニーズに合った“新全国調査”を展開するための具体的な実施計画を立てています。この内容は川崎病研究センター総会やニューズレターなどで報告していく予定です。

おわりに

2020年6月5日川崎富作先生が逝去された時、先生的笑顔に会い握手して戴けることを楽しみに学会場へ足を運んでいた私たちは心の支えを失いました。しかし、川崎病は病因をはじめ未解明の課題がそのまま残されています。日本川崎病研究センターと日本川崎病学会は共に川崎富作先生が中心となって立ち上げられた団体であり、2つの組織が目指すところは同じはずです。川崎先生に一日も早く原因が判りましたと報告できるよう、両団体の橋渡し役の一人として活動を続けたいと考えています。

日本川崎病研究センター会員の皆様におかれましても、是非、積極的な御支援・御協力を賜りますようお願い申し上げご挨拶とさせていただきます。

(当センター理事)

(一般社団法人日本川崎病学会理事長)

(東邦大学医療センター大橋病院
病理診断科教授)

『川崎病勉強会 2023』の開催に向けて

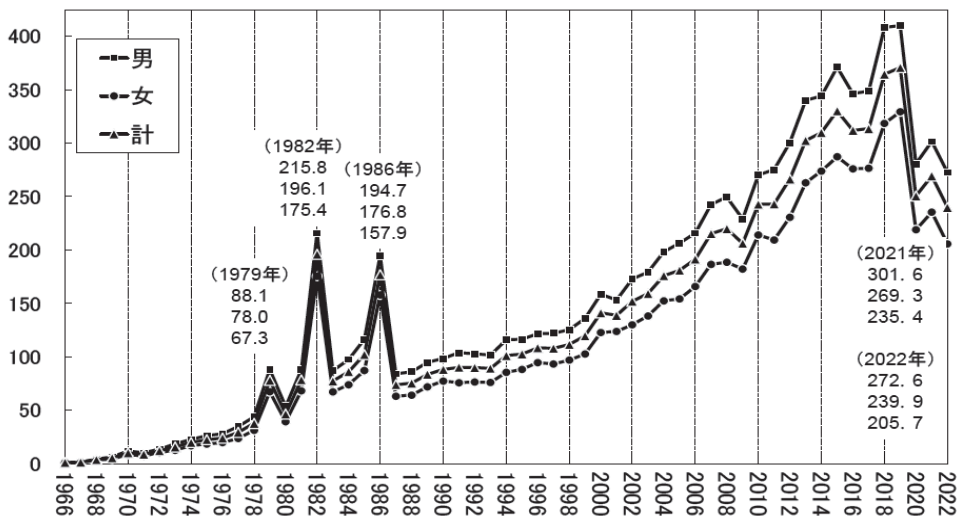
阿部 淳

今年度から川崎病研究センターの理事を拝命いたしました。2020年度から3年間監事を務めさせていただきましたが、これからは研究センターの重要な使命の一つである川崎病の病因解明のために一層努力して参りたいと存じます。何卒よろしくをお願いいたします。

最初の仕事として『川崎病勉強会 2023』のプログラム作りを担当させていただくことになりました。川崎病勉強会 2023 の名称ですが、開催は2024年3月16日(土)になります。2023年度ということで、(汗)。会場は前回と同じく東邦大学医療センター大橋病院の臨床講堂を高橋啓教授のご厚意で使わせていただくとともに、Zoomミーティングを併用してハイブリッド方式になる予定です。

さて勉強会のテーマですが、今回は「疫学研究が拓く川崎病病因解明への道すじ」としました。新型コロナウイルスによるパンデミックは未だ終息していませんが、ワクチン接種やマスク・手洗いの励行、抗原検査、罹患後の隔離などに直面する家庭や医療現場だけでなく、地域の保健行政や医学研究者たちの意識にも甚大な影響をもたらしました。川崎病にとってその影響が最も大きく表れたのは、罹患率の低下でした。下図のグラフに見る通り、2019年に歴代最高の370.8に達した罹患率(0-4歳人口10万対)は2020年には238.8、2021年には269.3、2022年には239.9(男272.6、女205.7)と3年続けてほぼ30%以上低下しました。この罹患率の低下は何に由来するのでしょうか。同じ期間に国内を覆ったパンデミックと関連するのでしょうか。関連するのならどのようなメカニズムで。

0-4歳人口10万対



RS ウイルス感染や溶連菌感染などの小児期に多い飛沫感染症が減ったから、という説明をよく聞きますが、川崎病の患者数の減少は実際にどの位それと関連しているのでしょうか？ また上のグラフでもっと理由が分からず興味深いのは、1980年代後半から着実に増加してきた罹患率の推移です。パンデミックの影響による罹患率の低下（？）をもってしても、2010年以前（わずか10年前）のレベルまでも低下しなかったことを、どのように受け止めるべきなのでしょう。

川崎病勉強会 2023 では、上記のような状況を踏まえて疫学研究にフォーカスすることにしました。特別講演を、川崎病全国調査を長年続けてこられた自治医科大学公衆衛生学講座の中村好一名誉教授に

お願いする予定です。さらに一般講演では、呼吸器感染症の流行や環境因子の変動と川崎病の罹患率との関連について、疫学的な観点からあるいは大規模データ解析の手法を用いて演者の先生方にアプローチしていただく予定です。

パンデミックがもたらした川崎病の病因解明のヒントがもう一つあると考えています。それは新型コロナウイルスに感染して2~6週間後に小児が発症する多臓器炎症性症候群（略してMIS-Cと呼ばれる）です。パンデミックの早期にヨーロッパ各国やアメリカなどで患者数が急増しましたが、症状が川崎病に類似する点から世界中の小児科医の関心を集めました。多くの関連する研究が発表されていますが、注目されるのは新型コロナウイルス感染のピ

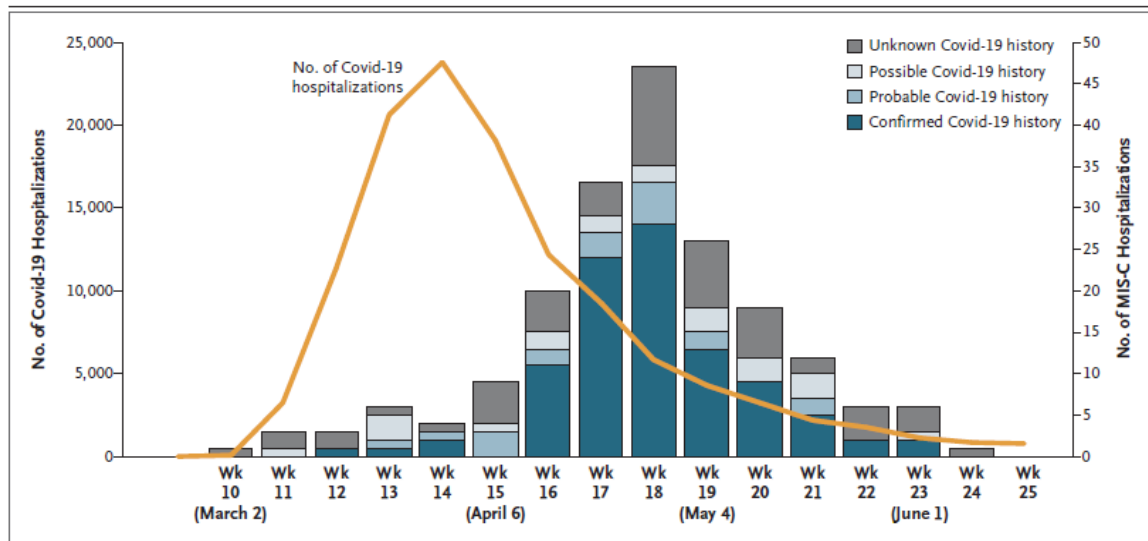


Figure 1. Temporal Distribution of Hospitalizations for Covid-19 and MIS-C in France.

Between March 2 and June 21, 2020, a total of 195 hospitalizations for the multisystem inflammatory syndrome in children (MIS-C) were reported in France, of which 138 cases were classified as being associated (possible, probable, or confirmed history) with SARS-CoV-2, the virus that causes coronavirus disease 2019 (Covid-19). Also shown is the number of hospitalizations for Covid-19 in the general population in France.

ークと MIS-C 発症の時間的なずれです。

2020 年のフランスの疫学データからも、
(折れ線が新型コロナウイルスの患者数、棒グラフが MIS-C の患者数を表しますが) 4~6 週間の明らかなピークのずれが認められます。川崎病と MIS-C とは異なる疾患と考えられますが、川崎病の病因を考える上で両者を比較するのはとても有益なことだと思います。疫学研究はこの問題にどうアプローチできるのか、演者の先生方に期待したいと思います。

みなさま、来年 3 月 16 日 (土) の川崎病勉強会 2023 に是非ご参集ください。各々が持つておられる疑問や仮定をぶつけ合うことで、原因解明への糸口を拓けて参りましょう。

(当センター理事)

(国立成育医療研究センター
高度先進医療研究室)

Japan Kawasaki Disease Research Center

Japan Kawasaki Disease Research Center

ニュースレター No.47 をお届けいたします。
ご意見ご感想をお寄せ下さい。

千葉の赤鬼、青鬼と川崎病

弘野正司

今から 40 年近く前、筆者は一時広島市内の小さな外科病院で働いていました。その院長は、たしか出身は新潟だったと思うのですが、大学は千葉大学の外科でいつもそのことを誇りに思っていました。ある時院長が、「昔の千葉大学の外科では、術後に輸血をしたあと患者が急に高熱を出して全身真っ赤になったり、真っ青になったりして死んでいった。われわれはそれを赤鬼、青鬼と呼んで非常に恐れていた。」という話をされました。その時筆者は何もわからず、フーンと聞き流していました。

7 年前、筆者が膠原病・リウマチの勉強を始めだした頃、偶然に広島駅前のホテルであった「広島川崎病研究会」に出席しました。一般演題のほとんどは覚えていませんが、最後に東京から来られていた川崎先生が、「川崎病もその治療法も日本人が見つけた。みなさんは是非その原因を見つけしてほしい。」と言われました。その言葉はいつも心の片隅に残っていました。

5 年前たまたま関東へ出てくる機会があり、そのうち 3 年間は千葉市幕張のクリニックで訪問診療の仕事をしていました。そして仕事のかたわら、徐々に川崎病の勉強を始めました。川崎病の勉強をしているうちに、「あれッ、この症状は、輸血後の GVHD (移植片対宿主病) 注) に似ている…? そ

ういえば、昔外科の院長が言っていた赤鬼がこれではないか…？」ということに思い至りました。赤鬼というのはその後、前処置を施していない全血輸血後に起こるGVHDによる全身性紅皮症だということが解明されました。

輸血も受けていない乳幼児になぜ赤鬼＝川崎病が起こるのか？と当然思われるでしょうが、妊娠中に胎盤を通じて母親からの血液が混入することは時々起こるらしいのです。この母親からの白血球やリンパ球が乳幼児を攻撃してしまう、それが川崎病の原因ではないか、というのが筆者の結論です。逆に言うと、妊娠中の胎盤に障害を引き起こす可能性のあるすべての因子-例えば、ウイルス感染や薬剤、タバコ、アルコール、妊婦の栄養不足、難産、等々すべて-が川崎病の原因となりうる、と考えています。

注) GVHD (移植片対宿主病) : 臓器移植の際に移植された移植片が患者自身を攻撃してしまう現象。輸血後の場合でいうと、輸血された白血球やリンパ球が患者自身を攻撃してしまうことを言う。

(筆者の論文は現在雑誌「広島医学」へ投稿中です。詳しくはそちらをご覧ください。)

(当センター会員)

(公立くい診療所 (広島県))

国際川崎病シンポジウムが開かれます。奮ってご参加ください。



14th International Kawasaki Disease Symposium (IKDS)

August 26th – 29th, 2024
Montreal, Canada
Hotel Bonaventure

ikds.org

The 14th IKDS co-chairs invite you to enrich your knowledge and network with international Kawasaki Disease experts in Kawasaki Disease in the warm atmosphere of Montreal, Quebec, Canada – a city rich in history and culture.

14th IKDS Co-chairs:

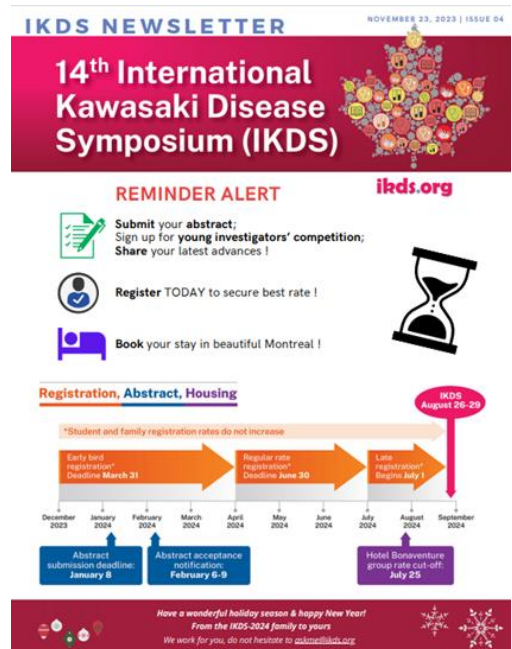
Nagib S. Dahdah, MD
Professor, Department of Pediatrics,
University of Montreal
Director of Clinical Research,
Cardiology Department,
Centre hospitalier universitaire
Sainte-Justine

Adriana H. Tremoulet, MD, MAS
Professor of Pediatrics,
Division of Host-Microbe Systems and
Therapeutics, Department of
Pediatrics, University of California San
Diego Associate Director, Kawasaki
Disease Research Center,
Rady Children's Hospital

REGISTER NOW!
Scan the QR code to register for the meeting and advance your knowledge in:

- **Bioinformatics/AI**
- **Clinical management**
- **Diagnostics**
- **Environmental science**
- **Etiology/Basic science**
- **Genetics**
- **Immunology**
- **Therapeutics**
- **And so much more...**

Presentations by leading experts from around the globe!

IKDS NEWSLETTER NOVEMBER 23, 2023 | ISSUE 04

14th International Kawasaki Disease Symposium (IKDS)

REMINDER ALERT **ikds.org**

Submit your abstract;
Sign up for **young investigators' competition;**
Share your latest advances!

Register TODAY to secure best rate!

Book your stay in beautiful Montreal!

Registration, Abstract, Housing

"Student and family registration rates do not increase"

Early bird registration*
Deadline: **March 31**

Regular rate registration*
Deadline: **June 30**

Late registration*
Begins: **July 1**

Abstract submission deadline:
January 6

Abstract acceptance notification:
February 6-9

Hotel Bonaventure group rate cut-off:
July 25

IKDS August 26-29

Have a wonderful holiday season & happy New Year!
From the IKDS-2024 family to yours
We work for you, do not hesitate to admin@ikds.org

事務局から

【センター日報】

- 2023年5月19日 2023年度第1回理事会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議
2022年5月19日 2023年度公募研究選考委員会開催 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議
2023年6月3日 2023年度総会と研究報告会開催（於:当センター） 1:00pm Zoom 会議
各年度の事業報告及び会計報告、次年度の事業計画及び予算計画は総会議事録と共に
当センターでいつでも閲覧できますので、お気軽にお立ち寄りください。
2023年6月3日 2023年度第2回理事会開催 総会后（於:当センター） Zoom 会議
2024年3月8日 2023年度第3回理事会開催予定 5:00pm～（於:当センター） Zoom 会議

【特定非営利活動法人日本川崎病研究センター会員総数】2023年12月末現在。

[正会員：66名、1法人、2任意団体]：[賛助会員：95名、1法人、0任意団体]

【学会・研究会・国際シンポジウム】

- ★ 第48回近畿川崎病研究会 2024年3月2日（土）13:00～ 於：完全Web開催
運営委員長：津田悦子先生（国立循環器病研究センター小児科）
- ★ 第43回東海川崎病研究会 2024年5月11日（土）
代表世話人：加藤太一先生（名古屋大学小児科）
- ★ 第44回日本川崎病学会 2024年10月4日（金）～5日（土）於：一橋記念講堂（東京）
会頭：深澤隆治先生（日本医科大学小児科）
- ★ 予定：第43回関東川崎病研究会 2024年 月 日（土）於：日赤医療センター講堂
会長：鮎澤衛先生（神奈川工科大学健康医療科学部／日本大学医学部）
- ★ 第14回国際川崎病シンポジウム 2024年8月26～29日 於：モントリオール（カナダ）
会頭：Najib Dahdah, MD ・ Adriana Tremoulet, MD
- ★ 「川崎病の子供をもつ親の会」問い合わせ先：Tel：0467-55-5257

新会員募集にご協力ください!!!

正会員 年会費 20,000 円

賛助会員 年会費 5,000 円

【川崎病に関するご相談】

専用アドレスを開設しました。<kdcentersoudan@gmail.com> 担当理事が、随時返信でお答えさせていただきます。電話・Faxによるご相談はご遠慮ください。

【川崎病急性期カードお申込み】

専用アドレスを開設しました。<kdcenterkdcad@gmail.com> 主治医の先生に記入して頂き、母子手帳などと共に保存して今後にお役立てください。

特定非営利活動法人日本川崎病研究センター

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町 1-1-1 ALES 6階（ビル名が変更になりました）
Tel:03-5256-1121 Fax:03-5256-1124